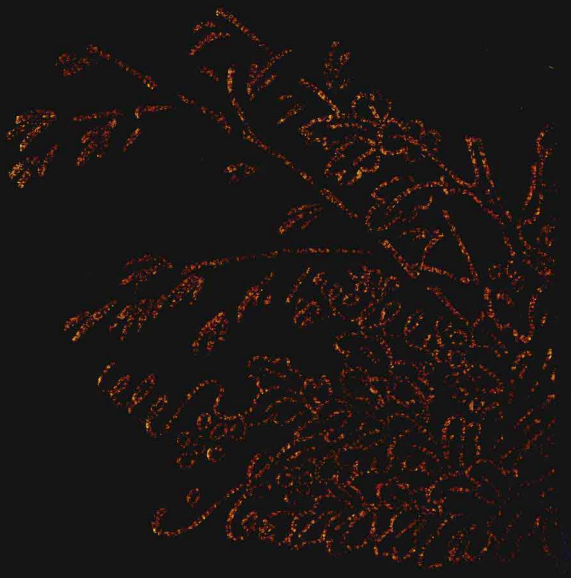

有島武郎全集

第十一巻

大正十四年一月五日印刷
大正十四年一月十日發行

有島武郎全集

第十一卷

（非賣品）

著者　有島武郎

東京市牛込區神樂町二丁目十一番地
發行人　足助素一

東京市神田區美土代町二丁目一番地
印刷人　島連太郎

東京市神田區美土代町二丁目一番地
印刷所　三秀舍

東京市牛込區神樂町二丁目十一番地
發行所　叢文閣

電話牛込　二五七三番
振替口座東京　四二八八九番

有島武郎全集　第十一卷

目次

日記
隨意錄……一
觀想錄　第一卷……三七
觀想錄　第二卷……一六九
觀想錄　第三卷……二八七
觀想錄　第四卷……四一三

目次

口　繪　二
著者と其家族（明治四十五年一月十七日寫於札幌）……（卷頭）

有島武郎全集　第十一卷　目次　終

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

隨意錄

明治二十四年九月二十二日。

赤白柔道仕合あり。余は赤にて、水野宜君と仕合をなし引合けとなりたり。而して赤白一帶の勝負は赤の勝なりき。而して赤の大將は山岡勉吉君、又白の大將山内文太郎氏なりき。而して道場は通常より美麗にして、場内の廻りには旗をめぐらし、入口には國旗を交叉して最も盛大なりき。此時は、三本以上の勝者に賞美を賜る。其人數は十一名なりき。今左に柔道仕合者の姓名を擧ぐ。（姓名略）

九月二十三日。

秋季皇靈祭。曇天。此日家に歸る。

九月二十六日。

晴天。土曜日。家に歸り暫くして佐山氏來遊し余家に一泊す。其夕余は宿に歸り、翌日日曜日朝早く歸家す。曇天なりき。夫より佐山氏、余及弟壬生馬と共に本所區横網町一丁目五番地藤堂家内津田氏に至り暫く金次君の歸るを待つ。暫くにして氏歸る時、朋友を一人連れ來れり（朋友の名は水野）其人と共に暫く旭倶樂部の議をなし水野氏歸る。夫より皆中食をなし、津田氏を出で渡しを渡りて淺草迄至り、見世物等を見、二時十分過ぎ頃歸る。其時弟及敬次氏は車にて先へ歸りたり。余等は厩橋を渡り藤堂高亮氏の家に行き、夫より運動會をなす學校を見に行き、歸る時に車に乘らんとし、二人引の來るを待て之れに乘る。金次氏は年十六、余は十三、英男君も余と同年なれば、實の二人引にても乘れざるなり。然れども無理に之れに乘り行く事一丁計りにして、余の乘れる車夫、他の車夫に之を問ひしに他の車夫曰く、夫はとても無理なり此車に此の如き大なる人が三人も乘れば必ず巡査の御とがめなるべし、と云ひしにぞ。余等は驚き忽ち車より下り錢も拂はず行きしまいしは最も氣の毒なりき。夫より津田氏に歸り種々の談話をなす内夕食も出來しにより、夕食をなしてたゞちにいとまを乞ひ津田氏を出で、柳澤氏と共に途中迄來りて柳澤氏に別れ、車をやとひて終に家に歸れり。夫より佐山氏は六時五十分の汽車にて横濱に歸り、余も又學習院に歸りて其日を終へたり。

埋木の花咲くこともなかりしに身のなる果ぞあわれなりけり　源　頼　政

心なき身にもあわれはしられけりしぎ立つさわの秋の夕暮　西　行　法　師

いかにせん頼むかげとてたちよればなほそでぬらす雨のしたつゆ　藤原藤房

ものゝふのよろいの袖をかたしきてまくらに近き初雁の聲　上杉謙信

美かき得て國のたからとなるものは人の心の玉にぞありける

弓矢とる身にはあらねど一筋に立てし心のすへはかわらじ　僧月照

身はたとへ武藏の野邊に捨つるともとゞめおかまし日本たましい

親を思ふ心にまさる親心今日のおとづれ何ときくらん　吉田松陰

我を人とひろしめてはすめらぎの玉の御聲にかゝるうれしさ　高山彦九郎

九月二十九日。

靴出來上り持ち來りたれども何分大きくてはけざるを以て、再び之を造り直させたり。今日より算術の開立をなしたり。

三種の神器の由來

天叢雲の劍は「すさのを」の尊の出雲に於て九頭龍をうたれし時其尾より出でし者にて、其時叢雲四方に起りしを以て其名あり。

八咫鏡は八手之鏡と云ふ。意味大にして立派なりと云ふ意味なり。而して其造神は日凝姥(ひこりひめ)の尊と申す。

八阪瓊勾玉は、やさかの勾玉と申して其意味は、赤くして立派なる光りたる玉と云ふ。其造神は天明玉命と申す。

十月三日。土曜日。晴天。

此日晝より埜崎君の所に行き夫より種々の遊びをなして中川君の所に至り、種々談話の末四時二十分歸舍す。

百傳授

（五十八）　あかぎれ直し

きめの惡しき人は如何にするもあかぎれを全治する事かたし。姑息の法にて一時凌ぎをなすの外なきなり。そは、グリスリンを二倍の水に混合し、手足に摩り込むなり。

（五十九）　小豆早煮別法

小豆一升に竹の葉一枚を入れて煮る時は早く煮ゆべし。

（六　十）　餅の早消化法

餅の食ひすぎて苦しむ人ある時は、むぎのもやしをせんじて服さしむべし。

（六十一）　石油火止の法

石油一升に、にがり（鹽の水）四合、椿の葉十匁、青松葉二十匁、明礬五匁、烏賊の粉五匁を混じ器に入れ煎じるなり。葉の赤色に變じ明礬の解けたるを度とし、其水を用ふるなり。（其葉は直にとりのけざれば其効なし）

（六十二）　硯水の凍らぬ傳

清酒を以て硯水となせば凍る事なし。

（六十三）　雪中の旅

足袋と足のひらの間にたうがらし三本入れおくべし。不思議に寒さを知らず。

（六十四）　手に付きたる石油

手に付きたる石油を除くには、茶又は茶がらを燻べ其煙にて手をあぶるべし。

（六十五）　なまづの藥

水又は湯にてナマヅの部分を涵し、指さきにて少しのグリサビーンを塗る事朝夕二度たるべし。大抵は三四回にて全治す。

（六十六）　耳だれを直す藥

オレーフ油を綿へしめして耳の中へさすべし。然る後スポイトを用ひ水にて洗ふべし。

（六十七）　たむしを直す藥

ヨヂュム一ゲレン沃度加里一ゲレン、アルコール一ヲンスを混合し、たむしの上にぬるべし。

（六十八）　齒のいたみを直す藥

ラッグニュムを綿にしめして齒のいたむ所へ入るべし。又葱を五分程の長さに切り、いたむ齒にてかみしむるもよし。

（六十九）　蚤除けの傳

胡妥子（こすあし）を水にて煎し、下着夜着等に毎日か隔日にふりかくれば、のみ生ずる事なし。

（七　十）　鼠食はず糊の傳

並の糊の中へこんにやく玉を少し加へて張るべし。

（七十一）　銅器の青さびを除く法

銅又はから金の器物に生じたる青錆は、米のりの强きものを付け、其上に紙を張り、日に干し、其後紙を剝けば錆は糊にうつりて落つべし。

（七十二）　水のよし惡しを見る傳

水を小茶碗に入れ、ホウシヤ一と切を入れ試むべし。其水濁ればあしく、澄み居れば良水なり。

（七十三）　蚊を除ける傳

苦楝の花と、栢の實と、菖蒲を同じ分量に細末にして燒くべし。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

（七十四）　醋のかびぬ傳

醋の中へ燒鹽を少し入れ置けばかび生ぜず。

（七十五）　火傷の藥製法

うどん粉を、やけどの上に厚くぬり、其上を木綿にて包み置くべし。

（七十六）　うち身卽治の傳

せうがの汁を酒にまぜ、うどん粉を煉り、うち身のいたむ所へつけ置くべし。

（七十七）　漆にかぶれたるを直す傳

幅一寸程の刷子（はけ）に荏の油をつけ、一日に三四回づゝかぶれたる所にぬるべし。

（七十八）　酒中花の製法

山燈心（とうしん）と云ふ木の心にて色々のかたちを作り、うすのりをつけてよくたゝみつけ、天日に干して置き、酒に浮かべる時はよく其形あらはる。

十月四日。晴天。

此日堀河君の所に遊びに行き、八時半頃歸宅し暫く休み、早食を食ひて日かげ町の大塚に至り靴をあつらへ、夫より銀座等諸方を歩きて家を見に行き、家に歸りしに北鄕君病氣にて打臥し居給ひける。夫より夜食をなし、

服を着かへ人力車にて幼年舍に歸りたり。

十月八日。晴天。木曜日。

午前五時半起床。皇太皇后陛下京都へ御發輦に付、六時朝食をなし、幼年舍學生は幼年舍のみ隊を組み、六時半門を出でゝ青山御所の傍に待ち奉る。暫くして、皇太子殿下御馬車にて青山御所に御出でありたり。七時二十分、皇太皇后陛下御出門、皆一同敬禮をなす。夫より歸舍す。時に八時十分前なり。放課後より丙の組卽ち我々の級及び陸海軍豫科の口頭演習なりしかば余は之を聞きに行きたり。其なせし人名及問題ひひよう等左の如し。

自重心の必要	安藤長造	草稿を持つ
航海業の隆替	花房太郎	同
「ナポレオン」の傳を讀む	比志島義松	同五分間
航海業の隆替	園田賦雄	草稿なし九分間
豐公征韓の話	平松時陽	草稿ある十二分間
同	眞木茂	同六分間
「ナポレオン」の傳を讀む	埜崎善藏	同六分間
豐公征韓の話	三上榮太郎	同七分間

同　　松方虎雄（草稿なし十一分間）

航海業の隆替　　香渡常盤（草稿ある十八分間）

其批評は左の如し。

元寇の如き著しき時に、あまり草稿を見るべからず。しせい話方はよろし。　安藤長造

演說の時いそぐ故、さくざつする。又例に、始めより西洋の例をひくは宜しからず。始めにことはるべし。

花房太郎

形容の言葉が自然出るならよろしいが、あまりありすぎる。言のごきが上がる。　比志島義松

少し言がそゝを。然し論の立てかたの宜しきは今日一二等の出來なり。　園田賦雄

事實多くあやまる。一二の例を擧ぐれば、加藤淸正が楊子江を渡り、又三韓よりの使者を斬るなどはちがふ。

然しおちつき能く述べる所よし。　平松時陽

體をうごかし、机に手を上げる。ごびのしりが上がる。げんかくでない。　眞木茂

とき方は誠によし。而しあまり草稿を見すぎる。又机に手をかけて後にそる。　野崎善造

草稿を見すぎる。言のごきが荒い。事實にをいても所々まちがう。言の用ひ方も正しからざる所あり。

三上榮太郎

能く事實をしらべ、草稿を見ないのはよろしい。然し文章がきれ〴〵で、聞く人がまちどをしい。少し熱する

様に。　松方虎雄

論の立てかた、又おちつく所よろし。然し其『甲』の事實について、之より大切なる事實のある時は能く考ふべし。　香渡常盤

十月十日。晴天。土曜日。此日靴出來たり。

同十日。土曜日。曇天。

此日晝後より埜崎氏の所に至り、夫より馬場氏の所に至りしに馬場氏不在なりければ、再び埜崎氏の所に至りて種々の遊びをなし、四十分に埜崎氏を出で、以て歸舍せり。此時余と一緒に行きたりし人々は、吉井仲助氏内藤三郎氏なりき。

同十一日。日曜日。晴天。

此日麴町通を通りて家に歸る。北鄕氏病氣なりき。晝後より柳澤金次氏及び津田敬二郎氏來訪。夫より硫酸を取り、夫より池の向に的を立て射的をなせり。暫くして二祖母及び妹、築地門ぜきより歸る。夜食をなし車にて舍に歸る。

十月十三日。晴天。火曜。

此日輔仁會演說部例會開會ありたり。其出題者は左の如し。

習慣の勢力　柳澤保惠

美學美術文學小說　內田周平

社會的勢力の趨勢　吳文聰

鐵砲傳來の話　山田良之助

文弱の弊を述べ併て同胞諸君に望む　小崎猛彥

柳澤君は缺席及び山田君は時間なき故やめ。

十月十六日。金曜日。晴天。

此日輔仁會總會ありて余等も出席したり。

十月十七日。晴天。土曜日。

此日は輔仁會及び幼年會の遠足ありたり。輔仁會は石川村、幼年會は二子迄。而して余は行かずして家に歸れり。

十月十八日。

此日朝より制服を着して運動會に至る。行く道に津田氏による。

十月十八日。日曜日。晴。

此日晝後より本所の尼寺に於いて、旭倶樂部運動會ありたり。余旗取り競爭にて一等を取りたり。夫より津田氏に至りて晩食をなし、以て家に歸る。

十月二十五日。日曜日。晴天。

此日家に歸る。時に埜崎氏の老母横濱より來る。夫より一泊して翌朝家に歸る。

十月二十八日。木曜日。雨天。

此日朝六時三分前頃より非常に大なる地震ありたり。

百傳授

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com